

溶かした「はぜ」の蠟を左手ですくっては、灯芯の上に掛ける。右手で、灯芯を刺した串をくるくると回転させながら、左手で均一な厚みに蠟を塗り重ねていく。蠟を掛けるたびに、一重、また一重とろうそくは年輪を刻むように太くなっていく…。

和ろうそく「大興」の三代目で、この道50年の大西明弘さんがつくるのは、「手掛け」の和ろうそく。手掛けの和ろうそく職人は、いまや日本に10人といない。「和ろうそく」というのは、日本の天然の植物蠟だけを使っただけです。そのなかでも、いろいろな植物蠟を試してみただけ、はぜの実から抽出した蠟がやはり最高です」と大西さん。

はぜのろうそくの炎は形が美しく、風がなくても静かに揺らめく。ダンスをしているように、あるいはビブラートがかかったように揺らめく炎は、不思議なほど、見る人の心をリラックスさせてくれる。そのうえ、「少々の風があっても安定した大きさを燃え、蠟が垂れにくく、煤も出にくい」。一方、一般的に出回る洋ろうそくは石油系のパラフィンからできている。少しの風で炎が大きく暴れ、煤も出る。ケークに刺して火をつけたら、ケークの上にとだらりと蠟が垂れてきた、という経験のある人もいるのでは。

さて、溶かしたはぜ蠟は、深い緑色をしている。温度は風呂の湯と同じくらいの40度前後。手掛けの工程では、まず「ふりかけ」と呼ばれる、灯芯を刺した串をはぜ蠟の中につけてなじませる作業を行う。そうして、つくるろうそくの太さによるが串を10本ほど手にとり、溶かした蠟を手ですくい掛けながら一層ごとに塗っていく「下掛け」が始まるのだ。

なお、和ろうそくの灯芯もまた、天然植物100%かつ手づくり。1本1本、和紙に灯芯草(いぐさ)の表皮を



和ろうそく職人

大西明弘さん



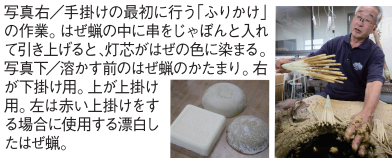
1952(昭和27)年、滋賀県高島市生まれ。1914(大正3)年創業の「大興」3代目。21歳で和ろうそく職人の道に入り、初代で祖父である大西一郎氏に師事。伝統的工芸品産業振興協会奨励賞受賞、大興の和ろうそくはNHK「ゆくゆく年々」で有名な曹洞宗大本山・永平寺・福井県で「用達」の仕事をする限り、はぜのろうそくは最高のろうそくだと言いつづけている。



写真上左／はぜのろうそく。炎の美しさはもちろん、ろうそくそのものも、上品なたすまい。写真上右／和紙に灯芯草を巻いてつくられる、和ろうそくの灯芯。太い灯芯が蠟をバランスよく吸収するので、蠟が垂れにくい。写真左／原料のはぜの実。



美しい形を保ちながら、心地よく揺らめくはぜのろうそくの炎。「はぜ蠟は、世界中で一番値段が高い蠟だけど、それだけの価値がある」(大西さん)。



写真右／手掛けの最初に行う「ふりかけ」の作業。はぜ蠟の中に串をじゃぼんと入れて引き上げると、灯芯がはぜの色に染まる。写真下／溶かす前のはぜ蠟のかたまり。右が下掛け用。上が上掛け用。左は赤い上掛けをする場合に使用する漂白したはぜ蠟。



和ろうそく「大興」  
滋賀県高島市今津町住吉2丁目5-8  
TEL 0740-22-0557  
https://warousokudaiyo.com



写真左／四代目・大西巧さん。写真中／グッドデザイン賞を受賞した「お米のろうそく」。写真右／「米ぬかろうそく・まめ」は、45mmと小さくてカラフルな米ぬかろうそく。パッケージには猫とねずみの絵が描かれ、「ねずみがかじっても安全な天然素材」をそっとアピールしている。

取ったもの」を巻き付けて真綿でとめてつくられる。「だから灯芯は、全部が同じじゃない。灯芯のクセを見極めて、ろうそくの太さを揃えるように蠟を付けていくのがまず難しいね」  
四季ごとの気温や湿度によっても蠟の付き方は変わる。「たとえば夏なら、1回目の下掛けした蠟が固まっただけでも、冷え切らず温かみを持っているうちに2回目の下掛けをしないと蠟は付かないのよ」。逆に冬は蠟が付き過ぎやすい。「厚く塗ると表面がきれいに仕上がらないし、ひび割れもする」。季節によって、いや、その日によって、微妙にやり方を調整する必要がある。「職人仕事ってええ加減。適当よ(笑)。だけど、その適当がぴたっと当たるようになるまでが大変なのよ。職人仕事は、やってナンボのもの。ひたすら経験して、体感的にわかるようになるには時間がかかります」  
下掛けのあと、さらに上質のはぜ蠟を「上掛け」し、串からはずして、灯芯を削り出したら完成だ。

和ろうそくは、今も昔もSDGsを実現

技術は経験で修得できるが、本当に難しいのは「はぜ」の良さを心の底から理解することだ」と大西さんはいう。いい材料であるはぜ蠟は、値段も高い。「大興のろうそくは高いと、売れない時代があつてね。そうすると、葛藤が生まれるわけよ。値段を優先するべきかと」。はぜ蠟より安い中国製の漆蠟を使ってみたことがあった。漆蠟は、歴史ははぜ蠟より古いし、色も濃い緑で似ている。けれど手触りが違った。はぜ蠟は、すーっと伸びがよくて、まろやか。漆蠟は明らかに粘り気が少ない。違いはわかりながらつくってみると、炎はバタつくし煤は出る。コシもなく折れやすい。安さと品質のはざまで迷う40代の大西さん。「そんなとき、現在も取引がある得意先が大興のはぜのろうそくを見て、『おお、これを探し

最高の原料・はぜの蠟と手掛けの技が、  
静かに揺らめく、美しい炎をつくり出す



左手に爪をつけ、太さを揃えるように「下掛け」していく。下掛けの回数を重ねて太くなるにつれ、一度に手に持つ本数を減らす。直径5.5cmの太い和ろうそくなら、50回ほど下掛けを繰り返す。「手掛けではなく、型に蠟を入れてつくればラクじゃないかと思うかもしれないけど、粘っこいのはぜの蠟は型から抜けない。型から抜くためには、滑りのいい(他の蠟を混ぜることになる。そうすると、燃焼に影響して、はぜ本来の美しい炎にはならないんです)」

てたんや』と言ってくれて。その人の言葉で、やはりいいものをつくらなあかんと腹がすわったんですよ」  
はぜは、九州など温暖な地域に生育する日本独自の漆科の樹木。秋に成る実から蠟が絞られる。「日本にしかない、日本の財産だ」と大西さん。「毎年、実をつけるはぜは、石油のように枯渇しない持続可能な原料。近年、エネルギー問題もあつて、政府も燃料として注目しているんですよ。僕たちがいい和ろうそくをつくり続けることで、はぜの木を残していけないといけないと思う」

はぜのろうそくは、古くからリサイクルもされてきた。お寺で燃え残ったろうそくを、今も昔も大興では貴重な原料として買い戻し、新しいろうそくとして再生させている。「江戸時代には、燃え残りの蠟を回収してお金に換える職業があつたくらいです」

余談ながら、九州などではぜ蠟を絞る蠟屋さんでは、当然、絞りカスが大量に出る。蠟は40度を下回つくと固まって絞れないので、絞りカスを燃料に湯を沸かし、蒸気の熱で温度を維持しながら絞る。つまり、蠟屋さんにはお湯がふんだんにある。「それでかつての蠟屋さんは、風呂屋さんを並行して営業していたんです」。SDGsなんて言葉がない時代から、モノがムダなく循環するシステムが蠟の世界では機能していたのだ。

現在、大興の社長を務めるのは、大西さんの長男で四代目の大西巧さん。廃棄される米ぬかから抽出した蠟そのまゝの色を生かして商品化した「お米のろうそく」をはじめ、植物蠟100%で自然にやさしく、日々の暮らしで使いたくなる和ろうそくを次々に開発中だ。「父がぶれずに、いいものをつくり続けてきたのは尊敬に値すること。そのおかげで僕は今、この仕事をさせてもらえるという信念は、父も僕もこれからもずっと変わりません」